幸田露伴少年文學『惡太郎のはなし』考

――作品表現と聖書世界との関連を視座として――

岡田正子

はじめに

『露伴全集』は、「少年文學」としてその第十巻の後半と第十一巻をあて、四十余作品を所収している。だが『惡太郎のはなし』は、再版に際して追加された別巻上にある。初出時の『惡太郎のはなし』は、第一、第二、第三、からなり、雑誌『生徒』明治二十二年（一八八九）九月十五日出版　第九號「露伴寄稿」、十月十五日出版　第十號、十二月十八日出版　第十二號（第十號續）「露伴子作」、明治二十三年（一八九〇）一月十日出版　第十参號「露伴子著」のように、四回にわけて（第二は第十號と第十二號に分けて掲載。第十一號には『惡太郎のはなし』はない。）、いずれも成章館から出版された。この初出時期からみて露伴「少年文學」の最初に位置するものと考えられる。『生徒』第壹號（明治二十二年（一八八九）一月五日）には、「『生徒』の發刊に就いて」の中に「尤も根本の教育に向て助けを與へんと欲するものなり。」と発刊の目的が書かれていた。

児童文学[1]には作者の人生観や生きていく知恵と共に、次世代に託す理想が込められると考えられる。露伴が少年達に託したかった理想、根本の教育とはいかなるものか。そしてその拠り所とするものは何か。この二点を作品研究

（『惡太郎のはなし』本文表現と聖書との関連）する事によって論証したいと思う。

註

⑴　福田清人『露伴と少年文學』「文学」一九七八　一一　VOL 46　岩波書店　一〇四頁（「昭和十年代から「児童文学」という呼称に代ったが、それまでは多く「少年文学」という呼称だった子供のための文学・読物に、明治期、幸田露伴は非常な熱意を注いでいる。」とある。）

※⑴本稿の本文は『露伴全集』別巻上（昭和五十五年二月十八日第一刷發行　岩波書店）所収（一頁～九頁）『惡太郎のはなし』に拠った。

※⑵（旧字体など適宜改めた場合もある。）

※⑶引用聖書については露伴の聖書は特定できない。本稿は聖書研究ではなく主旨引用である。よって時代的に露伴が目にしたであろうもの（後記）を用いた。

一　『惡太郎のはなし』第一への論証その1

――創世記にはじまる聖書世界内在化の浮上――

惡太郎といふ子供がありました。まことの名は太郎といふのですが、人の家の木の菓を取ったり、又は友達をあざむいたり、弱い者をいぢめたりなぞ悪い事をするので惡太郎と呼ばれたのです。　本文一頁

と記している。ここで注目したいのは「木の菓（み）」という表現である。これは聖書では、

木菓（み）の結る諸の樹とを汝等に與ふ　創世記第一章二十九節

としている。初出は勿論であるが、『露伴全集』もルビを省かずに「み」としている。

そこで、木の実についての聖書の他所の記述をみると、例えば

ヱホバ神其人に命じて言たまひけるは園の各種の樹の果は汝意のまゝに食ふことを得然ど善悪を知の樹は汝その果を食ふべからず汝之を食ふ日には必ず死べければなり　　創世記第二章十六～十七節

とこのように記されているのが見られる。創世記第一章「木菓」から「樹の果」と「菓」ではなく「果」となっているのである。つづいて本文一頁には、

はじめは人の家の庭にある林檎をとったのですが、今は人の家の子供の持て居る菓子を取る程になりました。はじめは友達をあざむいたのでしたが、今は學校の先生をあざむき、はじめは弱い者をいぢめたのですが、今は誰とでも喧嘩する程になりました。

このように、「悪太郎」の悪がエスカレートしていく様子を記している。この「人の家の庭にある林檎をとった」に着目したい。多くの果実の中でなぜ「林檎」なのか。明治初期には栽培種の移入があるから、その頃珍しい果実として取り上げたのかもしれない。だが、創世記のアダムとエヴァの話しでエヴァが「林檎」を取るという情景は、聖書から取材して描く事の多い欧州画家たちの好題材であったし、現在でも、聖書にはこの場面で何の実との明記は無いのにもかかわらず、エヴァが取ったのは「林檎」と想起する人が多いのではなかろうか。これについては（「岩波キリスト教辞典」など参照）、

キリスト教の伝統では、エデンの園でアダムとエバが食べた禁じられた果実をリンゴと表象することが多いが、これはラテン語学における「リンゴ（MALUM）」と「悪しき（MALUM）」の語呂合わせから生じた二次的な同定といわれている。またこの情景は欧州画家の好題材でデューラー（一四七一～一五二八、プラド美術館）などもリンゴとして描き、ミルトンは楽園喪失の長詩を書き、これに次のように記している。

Of tasting those fair apples, I resolved.

（ミルトン『失楽園』九：五八四参照）などといわれている。露伴はミルトンを読んでいたらしい。（笹淵友一『浪漫

主義文學の誕生』明治書院　六六〇頁）

実際に聖書を読むと「林檎」は所々に（例、約耳書一・一二、雅楽二・三、箴言二五・一一など）見られる。画家たちは、「創世記」で不明の実を、身近にある美しい果実というだけでなく、聖書の記述からも「林檎」を想起し描いたのではないかとも老えられる。

日本では明治初期から絵画美術教育に力がいれられ、岡倉天心やフェノロサらの尽力があって、明治二十二年初旬には美術学校が開校されたり、それより前、イタリヤからはフォンタネージらが招聘され、その時多くの絵画を持ってきたりしているようで、露伴もあるいは、その「林檎」の絵についての何らかの情報を得ていた可能性もある。

つまり、「人の家の木の菓を取った」から「人の家の庭にある林檎をとった」へと移る表現過程から、この作品は創世記を念頭において書き進められているのではなかろうか、ということが考えられる。

このように視点を定めると、次に本文は「はじめは」「今は」と対比させていることに気付く。本文にまず、「はじめは」とあることによって、

元始に神天地を創造たまへり　　創世記　第一章一節

に始まる創世記「はじめ」が想起される。

後年であるが、露伴は評論「一国の首都」（露伴全集」（第二次）第二十七巻所収　二十九頁）で、「アダムイブ以後の重畳せる過矢の塵埃を焚きて、」「能ふべくんば世界を楽園の罪無き昔時に回らし、」と記している。また、『方陣秘説』（『露伴全集』（第二次）第四十巻十三頁）では、「人は――〈略〉――神ニヨリテ作ラレタル天地萬象ノ中ノ一動物ナレバ、」とこのようにも記していて、露伴の神の概念にはキリスト教があるといえると考えられる。本文に「はじめは」「今は」としていることは、「楽園の罪無き昔時」と『惡太郎のはなし』を書いた明治二十二年頃の社会の堕落している人間のありようを暗に比喩、風刺しているともみえる。つづいて本文は、

其中に俠吉といふ子がありました。俠吉は今年十一ですけれども、心の正しくて強い子です。さうして情の深い子ですから、――〈略〉――かはいさうに思ひましたから、おまへはどうしたのだと、やさしくたづねました。――〈略〉――俠吉は静に、わたしが小刀を取り返してあげるから泣くのではないよとなぐさめて　　本文二頁

と記している。一連のこの事件は、「よきサマリア人のたとえ話」を想起させる。

ある人エルサレムよりエリコに下るとき強盗に偶り――〈略〉――

然ば此三人のうち誰か強盗に遇し者の隣なると爾意ふや　彼いひけるは其人を矜恤たる者なりイエス曰けるは爾も往て其ごとく為よ。　　新約全書路加傳福音書　第十章三十節～三十七節

この話しをふまえていると思われる。さらに本文は、

惡太郎は木の下に立って居ました。――〈略〉――顔を赤くしてだまりました。――〈略〉――どうかその小刀をあの子にかへしてやって下さいな。さうすればあの子は大そうよろこびます。さうしてわたくしもよろこびます。　　本文二頁

と続くのであるが、ここでも松、杉などと特定せずただ「木」とだけにしているのである。このことからも、創世記を意識していると考えられるのではなかろうか。

そして、「顔を赤くしてだまりました。」には、「惡太郎」の人間としての良心が垣間見られ、後の改心へとつながるものであるとも考えられよう。「さうすればあの子は大そうよろこびます。さうしてわたくしもよろこびます。」は、

喜ぶ者と共に喜び哀しむ者と共に哀むべし　　使徒パウロロマ人に贈れる書　第十二章十五節

をふまえていると考えられる。本文は続いて

又小刀を返してごらんなさい。大そういゝ心もちがするにちがひありませんよ。小刀を取れば神様の罰をうけて

長く心持のわるい目にあふでせうと、親切に云ひましたが、　本文二頁〜三頁

とあり、「神様の罰をうけて」という表現がみられ、また、「長く心持のわるい目にあふ」と、人間「惡太郎」の良心に訴えかけてもいる。本文は

げんこつをかためて俠吉を威しましたが、俠吉は少しも驚きません。　本文三頁

と記す。ここには、

なんぢ惡に勝るゝ勿れ善をもて惡に勝べし　使徒パウロロマ人に贈れる書　第十二章二十一節

がふまえられていると思われるのである。つづいて、

いくらかくれても逃げてもわるい事をした者を神様はゆるしませんから――〈略〉――懲役になりました。　本文三頁

と記す。悪いことをしたら、かくれても逃げても絶対に神様が許さない。ここに神の正しい裁きのあることが語られているとみられるのである。そして、

大勢の子供はいよ〳〵俠吉を尊みます。　本文三頁

とある。この頃の子供たちは、なかなか一人前とは見られなかった。にも拘らず、わずか十一歳の少年に尊ぶという表現がされている。この少年の人格が高く評価されているのである。理想像なのでもあろう。また、

学校の大先生から貰った小刀は銀の鞘に珠の飾りの付て居るので惡太郎が取った小刀より百倍もきれいでした。　本文三頁

としている。「学校の」としながら、校長先生ではなく「大先生」としているのである。「大先生」の意味は何なのか。おそらく「大先生」は、神ではないが、天使とか、イエレミヤのような大預言者、あるいはアアロンのような大司祭のようなものを想起させる呼称なのではないか。「百倍もきれいな小刀」は精神的な価値に対して渡されたもの

とも考えられる。つづいて本文は、

噫惡太郎は今は暗き部屋の中にひとりで居ます。どちらがりこうでせうか。　本文三頁～四頁

惡太郎は是からどうするでせう。まだいろ〳〵の話しがあります。

と読者の子供自身に問題を投げ掛けて考えさせるという方向にみちびいている。そして、次回へと読者の興味を引く事もわすれていない。

以上のように本文の表現を読み解いていくと、それぞれに内在化している聖書の世界が浮き上がってくる。「『惡太郎のはなし』第一」には、明らかに「創世記」が意識されているとみられる。「惡太郎」が折々に見せる良心の片鱗は、人間は神にかたどってつくられたものであり、その救済される所以の一片をかいまみさせるものなのではないかと考えられるのである。

二　「『惡太郎のはなし』第二」への論証その2

――成果のない言語で諭すだけの教育――

毎日〳〵白き髯の長く生えて居る老人が來ていろ〳〵の教を説き聞かしてくれるより他には誰と話しをすることもできません。　本文四頁

くるしき目に逢つても、自分の惡事を悔ゆる事はありませんでした。　本文四頁

白き髯のある老人は、惡事をすれば必らず神の罰を受けると云ったが、神様なんぞはあるものかばかな事を云ふやつだと腹の中に考へて居ましたが、　本文四頁

と記している。白い色は、全き純潔、清浄と不滅の栄光とを象徴するとみられる。髯についてではないが白髪や老人

については、

白髪は榮の冠弁なり、義しき途にてこれを見ん、
白髪の人の前には起あがるべしまた老人の身を敬ひ汝の神を畏るべし

箴言（しんげん）　第十六章三十一節
利未記（れびき）　第十九章三十二節

とある。したがって「白き髯のある老人」は、尊敬されるものであり、この老人の教えたことは、人間としての道、すなわち人間としての望ましい生き方についてであったと考えられる。それにもかかわらず、この間「惡太郎」の心の状態は、悪事を悔いることもないし、神の存在も信じないのである。本文は、

遠くの國へ行かうと段々海邊へ來ました。海邊には大きな船が一つ有りまして今錨をあげて是から遠くの國へむかって出る所でした。　本文四頁

と大きく場面転換をしている。「大きな船」からは、

汝松木をもて汝のために方舟を造り　創世記　第六章十四節

すなわちノアの箱船が想起され、これは大きな船であった。本文の「遠くの國」「海邊」「大きな船」という表現は、視点を日本から外国に大きく広げている。この船上で、「惡太郎」は一つの出会いをする。

隣りに居たのは五十許りの女と十許りのうつくしき女の子でした。――〈略〉――まことにふたりはうれしさうに日を送って居ましたが、　本文　五頁

とあり、この親子の生活態度は、

常に喜ぶべし斷ず祈るべし凡の事感謝すべし是イエスキリストに由て爾曹に要め給ふ神の旨なり
使徒パウロテサロニケ人に贈れる前書　第五章十六～十八節

を念頭においていると思われる。年少者向けに「うれしさうに」としたのであろうか。

たゞひとり隣りの女の子をうらやましく思って居ました。　本文五頁

とありここに見られるのは嫉妬とは異なる羨望である。「惡太郎」の心の綺麗さがある。

「未完」として初出ではここまでで終わっている。その後に、

「童子を教ふるの道言語を以て之を諭すよりは實際に美事善行を目撃せしめ之をして其心に恥ち其意に悟らしむるを勝れりとす故に古へより躬を以て人を率ゆるを教への第一義と為す以下話説（ママ）する所惡太郎の事を見て其違はさるを知るなり」

このような文章が書かれていた。これからみると書いたのは次の話しの成り行きを知っている人物であろうと考えられるが、明確ではない。『『生徒』第十號」には、言葉だけでは教えられないことが話されている。なお、「惡太郎もおとなしく家に居たらば、母に可愛がられて」と家族の記述がある。だが「俠吉」には全くその辺りの記述がない。「俠吉」の特殊性を示しているのではなかろうか。

三　「『惡太郎のはなし』第二（第十號續）」への論証その3

――恐怖体験と美事善行目撃による教育効果――

墨のやうな思い雲が出て來たので太陽の光りもなくなりました。おそろしくはげしき風が西の方から吹いて來ました。――〈略〉――劒のやうに光る電光はぴかりぴかりと黒雲の間からきらめきます。がら〳〵どうと雷が大砲を百発も一時に放したやうに鳴り出しました。――〈略〉――船の中に居た人々は――〈略〉――神様の名を呼んで助け玉へと祈りました。　本文五頁

この祈りは、

あゝヱホバよわれふかき淵より汝をよべり　主よねがはくはわが聲をきゝ汝のみゝをわが懇求のこゑにかたぶけ

たまへ　詩篇（しへん）　第百三十篇京まうでの歌　一節〜二節

とあり嘆願である。また、嵐の状況は「使徒行傳」にも、

斯て多日のあひだ日も星も見ずして疾風ふきあてければ我等つひに救るべき望さえ果たり――〈略〉――

使徒行傳　第二十七章二十節〜四十四節

などと記されているのが見える。次に、電光と雷鳴について聖書には、

雷と電および密雲山の上にあり又喇叭の聲ありて甚だ高かり営にある民みな震ふ　出埃及記（しゅつえじぷとき）　第十九章十六節

此とき許多の迅雷閃電また大なる地震ありき　ヨハ子（ママ）默示録　第十六章十八節

このように、神の力の象徴として、人間を震えあがらせるものとして書かれている。

この激しい嵐の間、「女の子」は「母の膝に取り付いて」「細き声で神様に祈って居ました」とある。一方、この時「惡太郎」はすがるものも、祈るものもなかったのであった。

このような体験を経てのち、「惡太郎」は、

惡事をしたのを今は悔しく思ひました。惡事をした者を神様は助けて下さるまいと思へばまことに悲しく苦しい事です。悲しい計りではありません。惡事をした故に神様の罰を受けたのではないかと思へば、まことに恐しい事です。ぴかりぴかりときらめく電光は劒の形をして惡太郎の胸をさし通します。がら〳〵となる雷は鐵砲のやうに惡太郎の耳を打ちます。雨は瀧のやうにふって來て惡太郎のあしき心を洗ひます。そこで惡太郎も悲しさと恐ろしさに罪を悔いて涙を流して神様に祈りましたが、　本文六頁

とあるように「神様の罰」を思い「罪を悔い」「神様に祈」るようになっているのである。

さらに洗うについて聖書には、

わが不義をこと〴〵くあらひさり我をわが罪よりきよめたまへ　詩篇（しへん）　第五十一篇二節

清き水を汝等に灑ぎて汝等を清くならしめ汝等の諸々の汚穢と諸々の偶像を除きて汝らを清むべし

以西結書（えぜきえるしょ）　第三十六章二十五節

などと記述されてあり、ここに至って「惡太郎」が改心した事がみられる。

電光の劒は「惡太郎」の良心につきささり、雷鳴は良心のおののきをいざない、雨は洗礼にもつかわれる水で、罪を洗い流し清いものにする。ここで、「惡太郎」は神の存在を認識し、初めて神に祈るようになったのである。しかし、まだ本当のものではない。後悔、改心に対する露伴の厳しさがうかがえる。つづいて本文には、

三艘目の舟を今出さうとして居る所でした。惡太郎は其舟の中へ飛び込みました。――〈略〉――一人をのせる事は出來ますけれども、二人を乗せる譯にはなりません故、――〈略〉――母さまを助けて下さい。――〈略〉――渦巻き立て居る浪の中に身を投げて仕まひました。――〈略〉――あゝ此むすめは死にました。然し其母親は助かりました。

本文六頁～七頁

とある。「此むすめ」の行為は親孝行の極致を示していると見えるが、それだけではなく、

人その友の為に己の命を損るは此より大なる愛はなし

約翰傳福音書　第十五章十三節

をしいていると思われる。また、本文において、

三艘の小舟に乗った人々は皆助かりました。身を投げて母を助けたむすめの話しは世界中にひろまりました。

本文七頁

とあるが、「此むすめ」の献身が日本だけでなく、全世界に伝わったこととしているのである。「世界中」という表現は聖書には「偏く世界を廻て」（新約全書馬可傳福音書第十六・十五）と記されているのが見える。また、

惡太郎は此話しを聞くたびに、はづかしくてたまりません。自分は男の子のくせに人を傷てにげ出したのです。むすめは女の子だけれども身を投げて母を助けたのです。

本文七頁

としており、当時の性差による期待される性格の基準のようなものが明確に見られる。

しかし惡太郎はどうしますか。次に話しませう。　本文七頁

と読者自身に考えさせると共に、ここでも次回へと興味をつなげている。

このように見てくると、「『惡太郎のはなし』第二（第十號續）」の難船の話しの中にも、聖書をふまえているのがみられる。「惡太郎」にとっては、「女の子」が母を救うために、目の前で荒れ狂う海へ飛び込んだ事が至上の教育になった。前号の終りに予告してあったように、まさに、「善行を目撃せしめ悟らしむるのを勝れりとす」であつた。ただ、「五十許り」の母親と「十許り」の「女の子」という設定は、その頃の風習からすると少し幅があり過ぎるようにも思うが、これも、「俠吉」のように、何か普通でない象徴的な親子の意味を暗示させているのかもしれないと、考えられないでもない。

四　「『惡太郎のはなし』第三」への論証その４

――隣人愛へと進展――

腹が減ってたまりません。――〈略〉――取って食ようと思ひましたが考へて見ると惡い事ですから取る事はやめましたがひもじくてなりませんから、――〈略〉――どうか瓜を一つ下さいと云ひました。　本文　八頁

ここでは嵐や「むすめ」のした事によって惡太郎の心に確実に変化があった事を示している。もう人のものを許可なしに取ることはしない。奪うのは悪い事と認識している。

爺さんひとり出て來ました。――〈略〉――瓜はやるから家へ來いと云ひました。　本文八頁

とある。老人の呼称が前は「白き髯のある老人」ここでは「爺さん」または「爺」になっている。「爺さん」に対し

て「婆さん」の呼称がみえる。共に庶民的呼称である。前述の「白き髯のある老人」は尊称で教える人であったことが解る。

「爺さん」は自分も貧しいのに見も知らぬひもじい人を助けようとする。ここに隣人愛が見られる。この「爺さん」に対して悪太郎も、その「涙」を見過ごす事はしない。互いに相手を思いやるのがみられる。そして、その「涙」の「譯を」きくと

悪太郎は委しく自分の仕た事を話し、又身を投て母を助けたむすめの事も話し、自分は難船のおそろしきとむすめの孝行とに後悔して罪に服し、今までのあしき心をあらため、是より善人となるつもりなれば是非縛って警察へ出せ。もし縛らなければ自分で縛って爺につかまへられたと云って出ると云ふので、爺は遂に悪太郎を縛りて警察へ出しました。　　本文九頁

と記している。ここで、「悪太郎」は自分自身悪い事をしたと認めてすべて話している。そして「あしき心をあらため」「善人となるつもり」と心に決め、「爺さん」に誓っている。しかもただちに「爺さん」を救うために、自ら進んで自分の身を捧げて、罪に服し償いをしようとしたのである。ここで「悪太郎」は本当の意味での改心をしたことになる。そしてただちに隣人愛を実行したのである。その「悪太郎」に対して社会はどう対処したであろうか。

まづ悪太郎を懲らしてのち、却って悪太郎が爺を助けたのをほめました。　　本文九頁

悪い事は悪いとして罰し、善いことは善いとしてほめている。露伴の理想の一端がうかがえるのではなかろうか。このような世の中が実際に実現するなら人間は平安であろう。

悪太郎は是より段々よき事をのみ為るので誰も悪太郎と呼ぶ者はなくなりました。太郎さん太郎さんと呼びました。太郎はいよ〳〵善き事をするので後には善太郎と云はれました。　　（明治二十二年九月）　本文九頁

として、『悪太郎のはなし』は（完）である。

太郎さんと本名を呼ばれることは、人権、人格の回復を意味し、善太郎と言われるようになったことは新しく生れ変わったことを意味しているのではなかろうか。

前回では、親子という肉親の間が主であったが、この回では全く未知の人々の間での愛へと進展している。場所についても、徴税とはしないで、貧しい生活の中での「年貢」という表現で、まだ世界という認識が薄いであろう少年読者の理解しやすいよう、日本であることを意識させている。そして、対象を他者へと広げた隣人愛の姿が述べられているのである。「惡太郎」が学んだのは、理想の愛の姿であったといえよう。

総　括

以上のように本文を読み解いてみると、『惡太郎のはなし』は、創世記の人間の「はじめ」の罪の話しから始めて、一人の少年が、神の存在に目覚め、罪を悔い、改心し、隣人愛を感得し、そして、それを実行するまでに成長していく姿を、少年読者の興味を引きつけるような構成をとって、書き進めているのであるといえる。このようにみる時、この作品には内在化している聖書の世界があり、作品の根底にキリスト教的ヒューマニズムが、深く浸透しているものであると言えるのではなかろうか。子供の興味をそそるように進行していく話しの中に、聖書の世界が内在しているのである。決して無理にあからさまに押しつけるようなことはしない。ここに、露伴作品のキリスト教受容のありようが明確にみられるといえよう。気付かなければ見過ごしてしまうが、実は深い意味を包含している。そして、その発想の根源には聖書がある。これが露伴初期作品のいくつかにみられるキリスト教受容の基本的姿勢であるといえると考える。そのありようをうかがうのに、この『惡太郎のはなし』は好例であるといえよう。

笹淵氏は「なさけなや扇持ちつつ読経とは」の詞書と新約聖書との一致の例をあげて、

露伴の西欧的なものの摂取の仕方は極めて同化的であって、換骨奪胎の妙を得てゐるために、ともすれば烱眼な批評家すらその本源を認めえないことが多いのである(1)。

としている。思うに露伴は、聖書を自家薬籠中のものとしているからこそ、笹淵氏のいわれるようなことができるのではなかろうか。露伴は、明治二十年北海道から帰京する途中でも、教会へ立ち寄っていて

「二十五日、朝、基督教會堂に行きて説教をきく。」(2)

と記録がある。この時の感想は余りよくなかったらしいが、自らすすんで教会に行っているのは、基督教に興味があったからであろう。そして家に帰ってみれば、植村正久師の説教に触発された父が改宗し、一家が熱心な信者になっていた(3)。そして、彼自身も、教会や説教所には行き、聖書も興味をもって読み、黙示録は非常におもしろかったようである(4)。

思うに、露伴のキリスト教受容は、血肉となって浸透していて、それを基盤にした思考をもって書かれた作品には、聖書の世界が内在しているのである。

後に『愛』(讀賣新聞　昭和十五年一月四日號・五日號『露伴全集』後記による)に、

人の此心の働きのさま〴〵な中で、愛が最も優美で靈妙で幽遠なものであることはいふまでもない。――〈略〉――基督教は愛を唯一神に掛けるべく教へて、愛の聖化に力めた。愛を主とする立派な教となった。そして其功徳を世に齎らした(5)。

と記している。昭和十五年に少しでもこういう事を言うのには、社会情勢からして、かなりの勇気と信念が必要だったと思われる。これからしても、露伴のキリスト教受容は表面にはあからさまには出ないが、深く浸透していて揺らぐものではなかったと言えるのではなかろうか。

我が国児童文学史は長い間、厳谷小波の『こがね丸』をもって児童文学の始まりとしてきた感があるが、福田清人

氏は露伴の『鐵三鍛』（明治二十三年一月この時は『鐵之鍛』）に注目し⑹、鳥越信氏は三輪弘忠の『少年の玉』（明治二十三年十一月）に注目している⑺。『生徒』明治二十二年九月号から『惡太郎のはなし』があることは意義深いと考える。

註

⑴ 笹淵友一『浪漫主義文學の誕生』昭和三十三年一月初版　平成三年六月六版　明治書院　六七六頁～六七七頁

⑵ 『突貫紀行』『露伴全集』（第二次）第十四巻　昭和二十六年六月五日第一刷発行の昭和五十三年十一月十七日第二刷岩波書店刊所収　十五頁

⑶ 柳田　泉『幸田露伴』昭和十七年二月十二日　中央公論社　五七頁

⑷ 塩谷　賛『幸田露伴』上　昭和四十年七月三十日　中央公論社　六五頁

⑸ 幸田露伴『愛』『露伴全集』（第二次）第二十五巻　昭和三十年四月二十五日発行の昭和五十四年五月十八日第二刷岩波書店刊所収　六六五頁、六六七頁

⑹ 福田清人「露伴と少年文学」『文学』一九七八　一一・VOL 46　幸田露伴研究　岩波書店　一〇四～一〇五頁（『惡太郎のはなし』には触れていない。）

⑺ 鳥越　信『日本児童文学案内』一九六三初版一九八一年二月第十二刷　理論社一〇頁

む す び

以上により、露伴が少年に託す理想、教育の根本は隣人愛を感得し実行する事であり、その拠り所、発想の根源には聖書の世界があるといえると考えられる。

昨今、数青改革の必要がさけばれ、「ゆとり教育」とかいろいろいわれているが、もし、今、百有余年の歳月をこ

えてよみがえる露伴の声をきいたなら、そのような枝葉末節を云々するよりも、まず、隣人愛を教育理念の根本におくことを、提唱するのではないかと考える。

＊後記　本稿で用いた聖書は、

近代邦訳聖書集成　⑥　旧約全書　第一巻　一八七七年原本発行［明治一〇年］（括弧内岡田記）
⑦　旧約全書　第二巻　一八八八年原本発行［明治二一年］（　同右　）
⑧　旧約全書　第三巻　一八八八年原本発行［明治二一年］（　同右　）
③　新約全書　一八八〇年原本発行［明治一三年］（　同右　）

以上いずれも　一九九六年四月二五日第一刷発行　翻訳委員会編　ゆまに書房

但し⑥の表紙には耶蘇降生千八百八十八年米國聖書會社

舊約全書明治二十一年日本横濱印行とある。他は表紙、奥付同年である。

なお以下を参照した。

聖書　口語訳新約旧約　バルバローデル・コル訳　一九六四年一〇月二四日初版発行
一九七二年三月二四日　六版発行ドン・ボスコ社

新約聖書　フランシスコ会　聖書研究所訳注　一九七九年一一月一日第一刷発行
一九八〇年三月一日第三刷発行　中央出版社

聖書　旧約聖書続編つき　新共同訳　引照つき　日本聖書協会　二〇〇二

――大学院文学研究科研究員――